
白昼夢

倅月 吾妻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白昼夢

【Nコード】

N5379A

【作者名】

倅月 吾妻

【あらすじ】

間違った恋なんかじゃない。愛してしまっただけ。唯、それだけのこと。

第一部：変化と夏

禁忌を犯しているわけじゃない

唯、愛してはいけない人を

愛してしまっただけ。

唯、それだけのこと。

そうだよね？

お兄ちゃん——

いつからだっただろう

この気持ちは

焦がれるほど熱く

凍てつくように冷め切った

私の初恋。

『沙和』

私の名を呼ぶ低い声

短く刈り込んだ色素の少し薄い髪

見上げなければ顔も見られないほど高い背

私の名を呼び、頭をなでる大きな手

すべてを手に入れたかった。

手に入れるためならどんな犠牲だって払えた。

私の総てを賭けた恋だった。

夏――

蝉の声が耳に張りついて離れない程の暑さだった。

沙和は東京の郊外にある自分の家へと向かっていた。

家とは言っても郊外には珍しく、マンションに住んでいる。

実家はマンションが在る場所より少し奥にある小さな民宿だ。

父があとを継いだ民宿は今にも外れそうな床板で、そんな暮らしが

嫌になった母は一人で事業を立ち上げ、一躍沙和たちが住む田舎の
有名人になった。

父はというと小さいころから馴れ親しんだ家、兼民宿を離れるのが
嫌らしく数人の従業員と共に住み込んで生活している。

沙和は昼は民宿、夜はマンションという結構奇妙な生活をしていた。
それというのも父が居たというのを知ったのは最近で、兄が居ると
知ったのはつい昨日のことだった。

「沙和、そういえばアンタお兄ちゃんには会った？」

「お兄ちゃん？」

「あら？言ってなかった？今年から大学生になるお兄ちゃん居るの
よ」

キャリアウーマンらしく長い髪を頭の後ろで綺麗に結びあげながら
沙和の母親、里美は言った。

第一部：変化と夏１２

夏休み初日の事だった。

母から聞いた話によると、兄は都会の方の大学に通っており、普段は一人暮らしだが夏休みは帰ってくるという。

最初は兄がいたことに驚きはしたものの幾つか心当たりがあった。

私が生まれる前のアルバムにちらほらと写っていたから。

バックがいつも父、政晃まさひろが経営している民宿だったので良く遊びにくる近所の子だと思っていた。

写真のなかの兄は小学五年生ぐらいか

短く刈り込んだ色素の少し薄い髪

小学五年生にしては少し高い背

程よく焼けた小麦色の肌

外見は沙和とはまったくの正反対だった。

長く伸ばした漆黒の髪

小学四年生にしてはかなり小柄な体

日に少しでも当たれば赤くなるほどの白い肌

何もかも正反対だったからよその子だと勘違いしていた。
正直言って逢いたいと言う感情はわいてこなかった。

実感がなさすぎたのだ。

兄妹なのに兄妹じゃない。そういう感情を沙和は兄に対して持っていた。

「明日お父さんの所に来るはずだから塾はお休みして会ってらっしゃい。」

「明日塾のテストだよ？ やすんでいいの？」

パツと顔をあげ、少しでも期待はしたものの、最近あきらめ癖が着いてきた沙和はすぐに俯いてしまった。

「テストなの？ どうして言わなかったのよ」

「どうしてって……」

「まあいいわ。塾が終わったらお父さんのところに行ってなさい。帰りに迎えに来るから」

それだけ言い終わると忙しそうに大量の資料と共に書斎に籠もってしまった。

第一部：変化と夏―3

テストだなんて、言わなければ良かった。沙和が通う塾では周一回テストが行われる。そのテストで最下位になると親と先生とで三者面談を行うのだ。

沙和はいつも下から二番目。

出来ないわけではない。

やりたくないのだ。

塾にはクーラーもあり、飲食もできる。そんな夢のような場所で何の不満があるのか。

沙和は塾のひんやりとして無機質な机が嫌いだった。

家と似ているから。

家に帰っても誰も居ない、広く冷たいマンションで一人母を待っていたのだ。

そのことが影響したのか、父と出会ってからほとんど一日中と言っている程父の経営している民宿に入り浸っていた。

出会った父は小柄だがいつも笑顔で大きな人だった。母が事業を立ち上げたときも援助をしてくれたのは父だった。

今思えば母に言っても来ない授業参観にいつも来ていた。その時は誰かのお父さんだと思っていたが今にして思えば沙和をみていたのだろう。

沙和を見る眼差しは兄とそっくりだった。

初めて兄に出会った時に思ったのが父に似ているという恋を微塵も感じさせない思いだった。

「沙和！お前宿題終わらせた？」

ハスキーな声が沙和の後ろに降り掛かる。

振り向くと良く日に焼けた浅黒い肌が目にとまる。

同じ塾に通う薫^{カオル}。女の子のような名前は亡くなった母の名前をとったらしい。

沙和とは幼稚園からの付き合いで、おとなしい沙和とは反対に活発な性格だった。

「薫ちゃん」

「ちゃん付けすんなって言っただろ」

少し不貞腐れたように言う。

「ところで宿題は？」

待っていましたとばかりに片手を差出しながら薫が言う。

いつものことだ。

観念したかの様に苦笑いしながら下げていたトートバックの中から宿題を取り出す。

「いつもサンキュな。そういや沙和の父ちゃんのところにお客さん来てたぞ。なんかやけに仲良さそうだったけど知り合い？」

「どんな感じの人？」

思わず足を止めた。

第一部：変化と夏―4

考えすぎか：と思い直す。

「ううん。何でもない」

「何だよ。変なヤツ」

皮肉っぽく言う薫にとびきりの苦笑いで皮肉を言い返す。

「じゃあ宿題見せなくていいんだ？」

「それは困る」

他愛もない会話を交わしている間に塾の前。ずかずかと冷たい階段を上がって行く薫を見つめる。逃げてしまおうかと考えながら。

「月島あ！遅刻だぞォ！」

突然頭上からドスの聞いた濁声が降り掛かる。驚いて見上げると担任の先生がテスト用紙をひらひらとさせながら沙和を催促している。

沙和は小さくため息を吐きながら暗く、冷たい階段を上がっていく。上がって行く足はまるで鉛のようで。

それでも無理矢理足を引きずって教室の在る三階まであがる。

「遅いぞ月島あ！」

正直いって先生の声は好きじゃない。うんざりするほど聞いているし。

「：すみませんでした」

小さく謝ると一番手前の席に着く。すると後ろから鉛筆か何かで突つかれる。

振り向くとそこには薫が。

「怒られてやんの」

「うるさいな」

「オイそこォ！テスト始めるぞ！私語はつつしめ！」

「「はっはい！」」

慌てて準備をすませ、テスト用紙が配られるのを待っているとふと、さっきの薫の話が脳裏に浮かぶ。

―お客さんか…珍しいな誰だろ？

兄かもしれないというのもあったが人のあまり居ないこの場所に何の目的で来たのだろうか、そういう気持ちだった。

「…い…おい…おい！」

後ろから呼ぶ声にハツとする。振り向けばイライラした様子で沙和の机に配られているテスト用紙を無言で指差す。

「あつごめん。今配るから」

ちっ、と小さく舌打ちする音が聞こえる。

「よォし！テスト開始！」

パン、パン、と乾いた音が響いた。

第一部：変化と夏―4（後書き）

重要な人物の兄がなかなか出てこなくて申し訳ありません。次回はだしますので！私もまだ高校生で分からないことや至らない所、表現がまだまだ半人前ですが、見守って頂ければ幸いです

第一部：変化と夏―5

「沙和あ。今日オマエの父ちゃん家いい？」

塾の帰り道、木に張りついていた蝉を捕まえて薫が言った。手には熊蟬か。相変わらず耳障りな音を奏でる。短い命の中で一夏、否、一生に一度の恋の為に。

「いいんじゃない？」

そっけなく答える。正直どうでもよかった。毎日来ているのだから。足元に転がる小石を思い切り蹴飛ばす。小石が綺麗な弧を描いてその後をいびつに歪む弧を描いて沙和のサンダルが飛ぶ。

飛んでいったサンダルはバランスを崩し、道の端にあった小さな川とでも言おうか。とにかく夏場に相応しくない程冷たい水の中に飛び込んだ。夏の暑さから逃げるように。

「あゝあ何やってんだよヘツタクソだなあ」

ニヤニヤと笑いながら自分の草履を放る態勢に入る。

「見とけよ俺の華麗な足技を！」

言うが早いか薫の足から沙和の足より一回り、二回りも大きな黄色い鼻緒が付いている草履が飛ぶ。

飛んだ草履はくると身を振らせながら有らぬ方向へと飛び去る。向かう先は沙和たちの歩いているあぜ道の左側にある雑木林。中からは永遠に続くような蝉の声。漂う沈黙。

「…薫ちゃんの方がヘタクソじゃない。どうする？取りに行く？」先に沈黙を破ったのは沙和だった。顔は引きつり笑いを浮かべて。それを見た薫は一瞬悔しそうな顔を浮かべたが、すぐに満面の笑みを浮かべて。

「これで沙和と同じだろ？」

相変わらずのニタニタ笑い。沙和は笑いを堪えることができずに

吹き出す。

腹を抱えてひとしきり笑ったあと、まだニタニタと笑っている薫に同じようにニタニタ笑いを向ける。

「お揃いになったことだしウチで冷やし素麺でもご馳走してあげよっか？」

薫のニタニタ笑いがますます強くなる。

「その言葉を待ってました沙和女王様」

照りつける太陽に汗が滲む。太陽の光で沙和の着ている白いワンピースが黄ばんで見えそうになる。薫はドコから取り出したのか、縁日などでよく売っている小さな電池を使う扇風機で扇いでいる。心底羨ましい。

ワンピースから出ている部分を真っ赤にしながらまだ歩く。

もうしばらく行くと木製の旅館のような建物が目に入る。田舎にしては高級感が漂う少し大きめの民宿だ。資金は宝くじ。祖父が祖母と結婚する前、偶然に買った宝くじがあたったらしい。宝くじには税金も出ないからそれをいいことに民宿を建てたそうだ。我ながら冗談めいた話だと思う。

足を踏み入れた館内はクーラーでひんやりとしている。背中や首に張りついた汗が引いていくのが分かる。

ロビーの方に父の姿が見える。話し掛けようと近づこうとしたがすぐにやめた。電話口で誰かと話している。なんだか嬉しそうな様子だ。

薫を連れてロビーの裏にある実家に上がる。そこはロビーと違い、クーラーは入っていない。懐かしい匂いがする。

父が受話器を押さえてこちらの方に話し掛ける。

「沙和！今日オマエの兄ちゃん来るって！来るまで冷蔵庫にはいつてる素麺食べてなさい！」

「はい！」

沙和の代わりに薫が答える。
蝉の声が一層強くなった。

第一部：変化と夏―5（後書き）

こんにちは。読みに来て下さった方々、本当にありがとうございます。もう本当に行き当たりばったりでかいているので大したものではないですが、これからも読んで頂けたら幸いです。

第二部：対面―1

「薫ちゃん麦茶とジュースどっちがいい？」

大きめの冷蔵庫を開け、頭を半分ほど突っ込みながら沙和が問う。その問いに当然のように答える薫。

「コーラ！」

冷蔵庫から体を戻し、眉間にしわを寄せながら沙和もまた当然のように答える。

「コーラは無いの」

そういつてまた視線を冷蔵庫に戻す

「俺はビール」

「子供がビールなんて……」

聞き慣れない低い声。明らかに薫のものではない。父の声でもない。父の声にしては若すぎる。第一、父はお酒は飲まない。

ゆっくりと視線を冷蔵庫の中から外し、薫が座っている居間のテーブルへと視線を移す。

蝉の音が頭の中で鳴り響く。

薫が呼ぶ声も耳に入らない。

写真と同じ、日に焼けた顔。短く刈り込んだ髪。高い身長。父に似た雰囲気。

目を、奪われた。

「会うのは初めてだろ？よろしく沙和」

私の意識を引き込むような穏やかな声。頷くのが精一杯だった。

「沙和あ誰この人だよ！朝見たの！知り合い？」

言葉に詰まる。自分の兄という確信が無かったから。

「俺？俺は沙和の兄ちゃんてアキ暁アキって言うんだ」

「女みたいな名前」

「薫ちゃんには言われたくないなあ」

「兄妹そろってちゃん付けかよ」

拗ねたように呟く薫をみて暁は大声で笑う。沙和はまだ視線が逸
らせない。

―私の…お兄ちゃん…？

冷蔵庫の冷気が足元に触れる。冷気が逃げて中の温度が下がると
鳴るブザーが鳴る。

「早く閉めろよ」

薫の声でハツとする。

「う、うん」

慌てて冷蔵庫の扉を閉める。閉めた後にまだ飲み物をだしてない
のに気付いたがもう一度開ける気にはなれなかった。

自分でも分かる程激しい心音。小刻みに震える足。火が吹き出そ
うな程熱い顔。

悟られまいと必死に震えを押さえ、俯く。それを不思議に思った
暁は沙和の目の前に立ち、額に大きなてをあてる。

「熱は…少しありそうだな。大丈夫か？家まで送ろうか？」

沙和は何でもない、とそれだけを伝えたと一人で帰ると言いだし
た。

「帰るんなら送るよ」

そう言って立ち上がるとする暁を制止し、足早にマンションへ
と足を進めた。震える足と動機は民宿を離れていくとともに薄れて
いった。

夜。布団に潜り込みながら今日の事を考える。動悸、震え、紅潮。
いままで起きたことの無いことが起こった。原因を考えると浮かん
でくるのは初めて逢った兄、暁の姿だった。

「…お兄ちゃん……」

小さく呟く。すると動悸がぶり返す。何だ。コレは。

「……暁……」

頭が痺れる。

コレは何？

私はどうかしてしまったのか。

いや、直感で分かる。

コレは多分

恋。

第二部：対面―1（後書き）

私が本当に書きたいシーンはまだまだ先ですが、それまで暇つぶしにでもお付き合いして頂ければ幸いです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5379a/>

白昼夢

2010年10月28日07時41分発行